特集 「失われた二十年」と日本研究の未来

屠所の糞と「ポピュリズム」の行方
――韓国小説『糞礼記』を読む――

沈 熙燦

一、「失われた二十年」と『糞礼記』

唐突であろうが、日本の「失われた二十年」を論じる前に、まずは一九六七年に発表されたある韓国小説の一部を引用しておきたい。

糞は干上がって黒い。糞礼はもう一つの自分を発見したかのように嬉しがる。ぴたりと寄り添い座っては、しばらく糞をみつめる。糞礼は鼻を当ててみる。臭いがない。何の準備、生命もない。乾いた草だけが生い茂っているところに侘びしく居座っている糞よ。ここは山のなかでもっともみすぼらしく、貧窮な場所だ。冬を越し、春を迎えた木や草は溌剌と躍動しているというのに。糞礼は自分の糞が労しく思われる。労しいから、そのようにずっと座っているのである。[1]

これは、当時二十代半ばにすぎなかった方榮雄を、一躍文壇の寵児にのし上がらせた『糞礼記』という長編小説の導入部である。『糞礼記』は、タイトルからも分かるように、「石糞礼[2]」という女性の一生を描いた小説であり、主人公「糞礼」はまた、その名前から推測できるように、何よりも卑賤な存在を象徴している。この小説は、今日に至るまで韓国の文芸批評を代表している季刊誌『創作と批評』に[3]、一九六七年五月から十二月まで三回に渡って連載されたが、当時の編集者側から異例の激賛を浴び、なおかつドラマ・映画化されるなど大衆的な人気を得たにもかかわらず、案外と本格的な

文学研究の対象としてとりあげられることは少なかった。[4]

もっとも、貧困な農村の日常を極めて繊細に、しかもスリリングに素描している『糞礼記』は、しばしば自然主義小説の秀作として評されるが、この小説の魅力は、むしろ現実、およびそれを説明する既往の言語や概念などが完全に掘り崩されているところにあるといえる。小説の具体的な内容については後述するが、本稿は、この『糞礼記』を「失われた二十年」を生きている現代日本とつなげて読みなおすことを目的にするものである。

日本の「失われた二十年」と、六十年代のある韓国小説を、同一の地平に位置づけて考えることは、もちろん強引な議論になりかねない。とはいえ、東アジアにおける冷戦構造の確立と、それに支えられてきた日本の戦後が「失われた二十年」に代弁される重大な岐路に立っていることを勘案すれば、一度は冷戦構造の成立期に戻って、歴史の地層に埋もれてしまった多様な生の痕跡を吟味してみることも無意味ではなかろう。「ポピュリズム」が氾濫し、民主主義の価値が絶命の危機に陥っている今日の日本において、革命の夢とその挫折といった韓国社会の六十年代を――作家の意図をも超えて――鋭く剔抉している『糞礼記』をある種のアレゴリーとして読むことは、むしろ非常に緊要な作業になりうる可能性すら秘めていると思われる。

二、誘惑には二度耐えろ

(1) 人種主義とナショナリズムの誘惑

東欧圏の没落、湾岸戦争の勃発、ワールドワイドウェブの開設などではじまった九十年代において、長期にわたるデフレーションや五十五年体制の崩壊という大きな変化を迎えた日本が、いわゆる「失われた二十年」の時代に進入していくようになったことは周知の通りであろう。冷戦の終焉と新自由主義の本格的な拡大、ポスト・フォーディズムなど産業構造における重大な変革は、アジアのモデルとしての日本の近代化を「失われた二十年」に塗り替えていき、国際社会で占めてきた日本の地位をも大きく揺るがした。

「失われた二十年」に対する定義はさまざまであろうが、とりあえず、アメリカの影響の下、平和と民主主義を掲げながら、経済的繁栄や政治的安定を謳歌してきた戦後日本が、そうした享受の対象を喪失してしまった時期だということができよう。そして、ここで指摘しなければならないことは、「失われた二十年」においてポピュリズムに乗じた右傾化が急速に広まったという点である。[5]

デヴィッド・ハーヴェイは、サッチャー、レーガン、鄧小平などが新たな経済政策を打ち立てていた「一九七八～八〇年」を、「未来の歴史家」たちは「社会経済史における革命的な転換点」とみな

すであろうと述べる。[6] 新自由主義的な経済システムの出現、つまり「社会経済史における革命的な転換点」は、日本において細川護熙、小沢一郎、加藤紘一、菅直人をはじめ、小泉純一郎の躍進や石原慎太郎、橋本徹などの大衆的人気という、いわゆるポピュリズムを基盤とする政治家と政策を相次いで登場させた。[7] 刺激的な扇動、マスコミの活用、大衆迎合的な主張などを通じて支持者をえようとする反民主主義的ともいえる政治家がのさばっていき、近視眼的な発想にもとづいた政策が乱立するようになったことを、私たちは今も目撃している。

このような状況は「既存の支配、既存の体制の中で、自分たちは抑えつけられている。政治的な意味で抑圧されている、言いたいことも言えない、政治に参加できない、権利を奪われている」という人びとの不満、および「働いても、働いても食っていくのがやっとのような経済的な不平等」に対する憤慨の現れでもある。[8] こうした不満や憤慨の原因が、新自由主義的な経済システムの社会への浸透にあることは自明であろうが、「ポピュリスト」たちは、この資本主義に本来的な敵対の意識を、既往の政治集団に向かわせるのはもちろん、排他的な人種主義や極端なナショナリズムへと導いていくことで、抜本的な問題提起の可能性そのものを遮断する。

暴力を随伴する人種主義や極右ナショナリズムが社会に蔓延ってしまう現象は、もちろん日本だけの問題ではない。とりわけ、フランス、オーストリア、ドイツ、イギリスなどのヨーロッパ諸国において、まさに「社会経済史における革命的な転換点」を切っ掛けとして勢力を増してきたさまざまな右翼ポピュリズム政党の例をいちいち挙げるまでもなく、[9] 韓国でも主に福祉政策や外国人労働者、東南アジアからの移住女性などをめぐって近年ポピュリズムが大きな論争の対象となっている。[10] 新自由主義のグローバルな展開と軌を一にして現れたこのポピュリズムは、多様な利害関係と公的要求がすこぶる複雑に重なっている社会の諸問題を、「善（私たち）／悪（外国人、悪徳資本家、無能な政治家、腐敗した公務員……）」という二項対立をもちいて単純化するだけでなく、その「悪」に対する公然の暴力を助長したりもする。[11]

要するに、危機的状況の「常態化」を必要とするポピュリズムは、二項対立を設定した上に「状況の複雑さへの理解、関与を」拒否しつつ、「この悲惨な現状の責任は誰かがとるべきだと確信」することで「つねに黒幕の存在が求められる」といった暴力性の噴出として現れるのである。[12] 自分に迫っている生存権の危機とその不安を人種主義やナショナリズムで補塡し、問題の本質を糊塗すること、これが耐えなければならないポピュリズムの一つ目の誘惑である。政治家の巧みなアジテーションに騙されたのだ、というのみで免罪符が与えられるはずもなかろう。[13]

（2）民主主義の誘惑

しかしながら、ポピュリズムに対して真の抵抗を展開するためには、これからは絶対だまされないようにと決心するだけでは不十分である。この点を韓国の最近の例から説明してみよう。

二〇一二年の第十八代韓国大統領選挙に野党の候補として出馬した文在寅は、子供の頃、練炭の配達をする母親のリヤカーを後ろから押していた記憶を繰り返し強調した。それは財閥や富裕層を後ろ盾にする朴槿恵と、貧困層だった自分を対比させようとする明確な意図をもつものであった。ところが、実際の生活においてリヤカーを引っ張っている人びとの多くは、文在寅ではなく朴槿恵に票を投じた。朴槿恵は、驚くことに毎月の収入二〇〇万ウォン未満の「低所得層」と「中卒」「高卒」などの「低学力層」、すなわち社会の「底辺層」から多くの票を獲得することに成功したのである。[14]

選挙の結果をめぐって、人びとの「利害を代弁」しえなかったことや、朴槿恵の「ポピュリズム的な公約」が「有権者にアピールした点」などが野党の敗北の原因としてしばしば指摘された。[15] こうした反応は、矛盾に満ちた毎日の生活に追われているため、政治家のプロパガンダに簡単に翻弄されてしまう受動的な存在として民衆を捉え、かれらの本当の声を代弁しなければならないという、左翼系知識人たちの啓蒙主義的な発想に由来していると思われる。[16]

ただし、選挙の前日に「死ぬ前に一つ願いがある。必ず聞いてくれ。明日の選挙で朴槿恵に投票しなさい」と自分の娘に電話で話したという老人の例から分かるように、[17] 人びとはただ単にポピュリズムに欺かれて朴槿恵に投票したわけではない。オーストリアの右翼ポピュリズム政党、ハイダーの自由党が「既得権益」から「はじかれてしまった人々」や「近代化の敗北者」――「労働者」「女性」――に対して「本来の民主主義」の回復を訴えていたことなどを、単なるデマゴギーだと軽視するのは、あまりにも素朴な理解であろう。[18]

なによりも「純粋な右翼人種主義の諸要素が、実は労働者たちの抗議を転置させた形で現れる」[19] という指摘に最善の注意を払う必要がある。新自由主義が強いる無限の競争体制において「本来の民主主義」への希求を含み込んでいる階級闘争や、断崖絶壁にせき立てられた人びとの切迫した声は、転倒した形とはいえ、たびたびポピュリズムの外観をまとって登場する。だとすれば、ポピュリズムとは、民主主義と相対立するものというより、むしろその臨界点を示す指標であるということを、私たちはもはや認めなければならないだろう。「小泉に一票を投じた人々が間違っていたのでは」なく、「私やあなたはポピュリストたる小泉に騙されたわけでもない」のだ。[20]

ベンジャミン・アルディティは、フロイトの「症候 symptom」の概念を援用し、民主主義とポピュリズムの関係を説明する。すなわ

ち、ポピュリズムとは民主主義によって抑圧されたものの回帰を示す「症候」であり、その意味でポピュリズムは民主主義の外部からそれと反目するものではなく、かえって民主主義に内在する異質な他者として、その自己完結を妨げる「内的周辺部」であるという。[21] アルディティの観点からすれば、ポピュリズムを克服すべき病理的なものとみなし、その批判に集中する態度は、民主主義という表象を密かに強化しかねず、逆説的にも民主主義一般に対する根源的な接近を予め遮ってしまうことになる。

しかも、ポピュリズムの語源がラテン語の「ポプルス populus」に由来していて、かつては「人民 people」を意味していたこと、[22] したがってそこには人民大衆の直接的な意思表明の熱望が孕まれている点を考えると、ポピュリズムの「否定的な側面」――「カリスマ的な指導者への感情的な同一視」「扇動や反民主主義的な政治に容易く巻き込まれる」――を「批判、あるいは解体しつつ」、ポピュリズムにおける「民主主義的な側面」――「人民主権」「反エリート主義」「反寡頭政治」――を「発展させること」が、[23] むしろポピュリズムに対して私たちがとるべき立場であるともいえよう。

ところで、この地点において、さらに致命的なポピュリズムの二度目の誘惑が生じることを見逃してはならない。ポピュリズムの両義性に着目し、その肯定的な側面から民主主義の弊害を修正していく方向に傾倒してしまいたくなる誘惑がそれである。一方「ポピュリズム」はすぐれた民主主義的な現象であるといえなくもない[24]ため、「ポピュリズムにはポピュリズムで反撃を」[25]する、あるいは「ポピュリズムとともにポピュリズムについて考え抜く」[26]といった戦略は、その典型的な例といえよう。

ここで必要なことは、社会的連帯を回復することです。律儀な人々が、自分よりも弱い立場の人々を怨むのではなく、ともに社会を構成する一員だという意識を持って、社会の立て直しのために一役買ってほしいと思います。[27]

民主政治を担うとされる「私たち」がどのような「人々であるか」を問うのではなく、どのような「人々たり得るのか」を問う時、批判や否定ではなく、可能性の連鎖としての政治が始まる。[28]

「律儀な人々」「ともに社会を構成する一員」「社会の立て直し」「どのような「人々たり得るのか」」などの表現から、定言命法としての倫理や道徳が、しかるべき民主主義の下敷きになっていることが読みとれるだろう。ここには、善良なる人間性の確立と、健全で自立した市民社会の成熟という、西欧近代的な民主主義のイデオロギーがこともなげに顔をだしている。結果として、欺瞞的なポピュ

リズムによる民主主義の歪曲や屈折が糾弾され、たとえば「熟議＝参加民主主義」のような古典的な民主主義の理念が代案として掲げられる。[29] こうした認識においては、「熟議＝参加民主主義」というのが、民主主義の前提どころか、むしろその効果、ないしは表象にすぎないという点が少しも考慮されていない。そのためポピュリズムは、民主主義の核心に迫るための理論的武器ではなく、ただ民主主義を擁護する手段に止まってしまう。

このように「律儀な人々」によって築きあげられる「熟議＝参加民主主義」の時空間には、便所に溜まった糞の上に生まれ、屠所の片隅を住処とする無精子症の「ヨンパル」に強姦された後、結婚するも、賭け事にふけっている夫に殴られつづけ、終局には気が触れてしまう糞礼の数奇な運命、あるいは捨てられた赤ん坊を拾ったヨンパルが、まるで自分の妻が産んだかのように見せ掛けるため、屠所のあらゆるところに散らばっている動物の血や皮を平然と使うといった、おぞましい生のために準備された場所が、果たして存在しているだろうか。

にもかかわらず、もし私たちが――マルクスなら「ラ・ボエーム」「くず、ごみ、かす」と呼んだであろう[30]――そうした最下層民によって展開されるべき政治というものをどうにかして言語化せんとするならば、健全なる民主主義の樹立というポピュリズムの二つ目の誘惑を拒みながら、「さらに一歩進んでいく」[31] 作業に邁進する他はなかろう。「失われた二十年」において、私たちは誰もが社会構成体から放逐される「ラ・ボエーム」に転落してしまう危険性を抱いていることを忘れてはならない。『糞礼記』の作家が執筆の動機について次のように述べたのは、一九九七年である。「ただ、私が生きているこの生活の基盤が、何か間違っているのではないかと強く感じていた。……この小説は農村小説ではない……いうなれば、私の分身に他ならない糞礼があなたの分身でもあることを、あなたの友達や隣でもあることを願う……」（五―六頁）。

三、排泄の夜

（1）汚物の存在論

先述したように『糞礼記』は一九六七年に発表されたが、そこに描かれている時代を推定することはほとんど不可能に近い。「解放から二、三年」（一九頁）という時代設定はあるものの、小説のなかの多様な場面をみるかぎり「一九三〇～六〇年代のどの時代も候補になりうる」。[32] こうした「没歴史性」[33] ゆえに、『糞礼記』は「歴史意識や社会意識がない」（五頁）と批判を受けたこともあるが、「歴史的時間の排除」は、むしろ「歴史創造の次元が除去された世界の実像を、むごたらしく、容赦なく」表現するための手段として働いている。[34]

なるほど、『糞礼記』は農村を背景とする作品であるにもかかわらず、まじめな農夫は一人も出てこない。労働と発展、進歩と成長などの概念が完全に削除されている『糞礼記』の世界において繰り返し強調されるのは、ただ排泄・倦怠・飲酒・暴力・性行為などにすぎず、登場人物は一人残らず全員「むさ苦しいとしか言いようがない人間たち」[35]である。

> 石旦那と石旦那の妻は、来る日も来る日も喧嘩沙汰である。こんなに雪が積もる冬なのに、食糧の用意、木の用意はせず、石旦那は酒場や賭場にばかり出入りする。女やせがれが飢えようが食べようが、自分だけ食いやがる。（三五頁）

糞礼の父である「石旦那」は「ほとんど働かない」のはもちろん、「部屋にくすぶっては、たまにひもじくて泣いてしまう子供たちを殴ってやるのが常」である（三八頁）。糞礼の母もまた、朝になっても起きるどころか、腹が空いてむずかる五歳の子供の額を小突きながら「このくそやろうが……お前ら、みんなずっと寝ていろ」と怒鳴るばかりである（三五頁）。長女の糞礼はこっそり妹や弟たちのご飯を作ろうとするが、そのたび「このあまが！　そんなちっぽけな飯を食ったってどうなる」と、かえって母に叱られる（三七頁）。「寒いときは冷たくなった服を着るのがいやで、暑いときは暑いから服を着るのがいや」という糞礼の母は「いつも下着のままで」あり、「顔も数日に一回洗う」ほどの「とても怠け者だ」（三七―三八頁）。

より良い生活への意欲などは毛頭なく、いかなる生産的な行動もしない糞礼の父母は「子供たちにも何もさせずに、ただ寝かせようとする」（三六頁）ため、あらゆる家事はもちろん、食べていくための最小限の労働は、すべて糞礼に任される。最小限の労働といっても、すえたり、苦かったり、しょっぱくて食べられなくなった「ごみ」のような「キムチ」を村の人びとに物乞いするぐらいのことである（五〇頁）。それでも糞礼がこのような悲惨な生活に耐えることができるのは、「すらりとして肩幅の広い」「凛とした」男性の嫁になりたいという夢をもっているからだ（六〇頁）。

しかし、糞礼に恋心を抱いている男は、村人から「獣の小屋」と呼ばれる家の次男、「白痴」の「チョルボン」である（四二、四四頁）。長男の「スンボン」とチョルボンを産んだ母もまた「盲人でつんぼ、白痴」であり、スンボンの妻は「唖（おし）」である（四二頁）。難産ゆえ「豚の睾丸を切るときの叫び声」「獣の悲鳴」をあげたというスンボンの妻は、「自分が死にそうになったことを考えると身震いがする模様で」、「姑が乳をやれと張りあげるやいなや、飛びついて赤ん坊を踏み殺そうと」する（四三頁）。

唖の乳はいつもぶくぶく膨れあがっている。唖はこれを自分の子供にやる代わりに旦那にあげてしまう。……生まれたときから乳を少しも吸うことができなかった子供は、顔が黄色く、細い木の枝のような足がよれよれとねじれている。夏に子供が泣き疲れて眠ると、汚く絡みついていたハエが鼻や口から入っていき、糞をするさいにそれに混じって出てきた。子供はいつもぽつんと横になっている。……子供はほとんど死んだような状態であって、むしろ今まで死ななかったのが奇跡といえる。それでも何か食べたいのか、老婆の手に触れられると口を大きく開く。……スンボンは乳を交互にがつがつと吸う。他の部屋で半死の子供とは違って、ふっくらと太った顔が白い。（四三―四四頁）

このように『糞礼記』の世界においては、ご飯を食べ、育児をするといった「動物的な生」までもが「否定」されている。[36] 癲癇をもちながら屠所で働く「コンジョジ」、そのコンジョジに強姦され子供を産む「狂女オッカ」、オッカが捨てた子供を拾って育てるヨンパルとかれの妻「ビョンチュン」、旦那と男妾と同棲する「ノランニョ」、毎日酒を飲んでは自分の娘であるノランニョと喧嘩ばかりする「老婆」などなど、『糞礼記』の人物たちは異なる価値判断がやたらに離接している世界、短期性と非一貫性がかえって常態となる世界を生きている。[37]

有機的・意味論的な秩序から放りだされ、「非／歴史」の時間をラングとして漂う糞礼の生を、整合的に説明することは不可能に近い。『糞礼記』には、なぜ糞礼がそうした辛い経験を味わわなければならないのかに対する説明が少しも見当たらない。糞礼の人生を支配している貧困と不幸を、封建的桎梏――両班や地主などの支配階級による搾取、身分制の束縛――あるいは資本制生産様式の矛盾――都市と農村の格差、近代化・産業化の暴力――という社会構造的な関係から説明しようとする姿勢が、この小説には完全に欠落しているのだ。その代わりに、糞礼の人生を決定する重要な場面においては、「誰かが憤った揚げ句に罰を与えてくれたかも知れない」「その名もない鳥たちは誰かの使者だったろうか」（三一頁）、「カササギがかあかあと鳴きながらどこかに飛び立っていく」（二九三頁）、「闇を含んで揺らいでいる二本のポプラは、地獄門の両側に立っている悪辣な番兵のようだ」（三一〇頁）といったように、神秘的な運命の力や、そのコスモロジーが不気味に描かれるだけである。そして、それらの場面において、糞礼はほとんど例外なく排泄をする。「彼と我、加害と被害、能動性と受動性が分化していない、自我の境界自体が薄暗い」「世界」において、[38] 糞礼は何かに憑かれたように糞をたれる。

糞礼は草藪に身を隠し、チマを捲りあげた。尻をむいて座っては、尿をぶっ放す。下着を大雑把に穿きつつ鼻をちいんとかむ。指に付いた鼻汁を松の根元にすぱすぱと零し、鼻に付いた鼻汁はチマで拭いとる。（一二四頁）

父と娘は、がたがたと震えながら棺の輿がおかれている小屋から出てくる。糞礼は石旦那が鍵をかけるさい、さっさと尻をむいて座り、おしっこをする。引き締まっていた下腹がすっきりすると、糞礼の心も軽くなったようだ。石旦那もおしっこがしたかったのか、鍵をかけるやいなや急いで遠くまでいき、おしっこをする。娘は白い雪原の上に大きくて老いたカボチャのようなものを作り、父は立ったまま小さいズッキーニのようなものを作る。（一七二―一七三頁）

ヨンパルは石旦那の妻の泣き声を聞きながらサプティ峠を登っていった。草深い道を草押し分けつつゆっくりと登る。ついさっき誰かが登った跡がある。露を宿した綺麗な草葉が、泥の付いた靴に踏みにじられている。ヨンパルは注意深くそれらを見つめながらサプティ峠にあがった。すると目を大きく開いて、歩みを止めてしまった。糞礼がボンスンの墓にまたがって糞をたれているではないか。チマをすっかりと捲りあげ、肛門を少しもちあげていた。……棘からコメツキバッタ一匹が飛び去っていく。山鳥の群れがはたはたと羽ばたいていく。ちらっと後ろをみた糞礼は、草の葉をむしりとって尻を拭う。下着を慌ただしく着て立ちあがった糞礼は、ヨンパルを振り返り大きく笑う。（三二七頁）

右の引用文はそれぞれ、友達の「ボンスン」が結婚前に強姦され自殺した後、すでにヨンパルに強姦されていた糞礼も罪悪感で自殺を遂げようとするが、やめて生きようと決心する場面。結婚が決まり、式の当日旦那となる男の家に父と一緒に行く場面。その旦那から暴行を受け、旦那の家族からも浮気をしたと誤解され追いだされた糞礼が、ついに狂ってしまい村を去っていく最後の場面である。「いかなる上昇運動も否定された」糞礼の生は、「苦痛や受難さえ劇的なものになりえず、生の自意識的な配置や言語的な顕現がありえない場所」になげうたれているが[39]、それゆえ糞礼は、「非存在」としての排泄物を自分のなかから押しやることでしか己をめぐる世界の意味が確認できない。

要するに、排泄物という意味の陥没点に、むしろ糞礼は存在の意味を刻み込むのである。小説の至るところで糞礼が追いだす排泄物は、「何の準備、生命もない」（二四頁）、つまり死の世界に属する「おぞましきもの（アブジェクト）」であるが、その「アブジェクト（abject）」は同時

に、「生者としての私の条件の限界」を示すものでもある。[40] 生きているものは、己の生を維持するためにさまざまな汚物――毛、爪、糞、尿、膿、鼻汁、粘液、吐瀉物など――を排出しなければならないが、だとすれば、生はそのような汚物によって支えられているともいえるだろう。[41]

頼るべきいかなる「価値判断」もがもつれている世界を生きている糞礼にとっては、この「排出、痙攣、叫び声」「しゃくり上げ、嘔吐」こそが「自分を産みおとす」「糸口」になるのだ。[42] アブジェクトは、存在の末端において、境界をぼやかしながら存在そのものを支える。「非存在と幻覚のほとりにあって、私がそれを認めるや、私を打ち砕く」この「何かあるもの」。[43] こうしたアブジェクトは、「同一性、体系、秩序を攪乱し、境界や場所や規範を尊重しないもの」であって、「人はそれから自分を切り離せないし、身を守ることもおぼつかない」。[44] アブジェクトは「われわれに呼びかけ、ついにはわれわれを呑み込んでしまう」。[45]

アブジェクシオンはなるほど境界なのだが、わけても両義性である。なぜなら、アブジェクシオンは拘束から解放するとはいえ、主体をその脅威から徹底的に振りほどく訳ではなく、逆に主体が絶えざる危険に瀕しているのを自認するからである。だがそれと同時に、アブジェクシオン自体が判断と情動、有罪宣告と愛情表白、記号と欲動の混成であるためである。前＝対象関係の古層から、また一個の肉体がその存在のために他の肉体〔母の肉体〕から自己を分離する際の始源の暴力から、アブジェクシオンは闇の夜を、意味された事物の輪郭が崩れ、測り知れない情動だけが働いているあの夜を持ち続けている。[46]

主体から排除された汚物としてのアブジェクトは、主体の確立を可能ならしめつつも、主体を危険に陥らせる。アブジェクトは主体の境界を確定すると同時に、その機能を停止させるのである。そして、ジュリア・クリステヴァが述べるように、私たちはつまるところ「母の肉体」から分離（排泄）された存在に他ならない。したがって、もっとも卑賤でおぞましいものであるアブジェクトは、私たち全員に宿っているといわなければならない。人は「境界を消し去った世界の瓦解するのを視て」「失神する」。[47] 糞礼の強迫的な排泄と精神の崩壊を、こうした観点から読みとることができよう。

棺の輿をみて、自分の結婚式に「乗っていく輿ならいいのに」（一五七頁）とつぶやく糞礼は、父の反対を押し切って、とうとう結婚式の当日に棺の輿を保管している小屋に入り「裸になって踊りたいほどいい気分」（一七一頁）を満喫する。「あんなに怖かった棺の輿の小屋が、こんなにも親しみ深い場所だったとは」（一七一頁）。このように糞礼においては「おぞましさの極みとなる」[48] 死が生と相

接している。『糞礼記』は、まさに「闇の夜」とその情動の文学的表現であり、また糞礼は、アブジェクトとしての私たちを象徴する存在であるのだ。

（2）「高貴な無秩序」

前述したように、民主主義に内在する異質な他者、その「内的周辺部」がポピュリズムであることを念頭におけば、ポピュリズムは、いわば民主主義のアブジェクトとしての性格をも有しているといえよう。よってアブジェクトとしてのポピュリズムは、反民主主義／真の民主主義といった対峙する言説の一方に属するのではなく、むしろその線引きが鈍くなっていくところに（非）存するものだといわねばならない。繰り返しになるが、「アブジェクシオンを前にしては意味はひび割れ、拒絶され、棄却された（ab-jecté）意味、つまりは滑稽な意味しか持ち得ないからである」[49]。すなわちポピュリズムは、端から民主主義を汚染させながら、「意味が崩壊する場所へ」それを「引き寄せる」[50]。『糞礼記』が今日における民主主義の危機に対して、何か示唆することができるのも、まさにそのためである。

第一に「歴史創造の次元が除去」されている『糞礼記』の世界は、韓国における最初の民主主義革命ともいえる「四月革命」（一九六〇年）の理念が朴正熙の軍事クーデタ（一九六一年）によって横取りされ、「経済開発五カ年計画」の実施と（一九六二年〜）、人びとに「民族中興の歴史的使命」を担わせようとした「国民教育憲章」（一九六八年）が制定される時代においては――「この作品を書いていた当時には、歴史とは何か、社会とは何かが分からなかった」（五頁）という作家の告白とは別に――それ自体として急進的な側面をもつことができたと思われる。しかも、当代の課題を「貧困と後進性」の「超克」に設定し[51]、「異相気質」――不信、二重性格、退廃的自己防衛、不労思想、劣等意識、奴隷根性など[52]――の打破という観念的・実践的な跳躍を促そうとした左派の戦略も、経済的・思想的な近代化を主導する軍事独裁政府の近代化政策と決して程遠いものではなかった。「進歩の名の下で展開された抵抗が、国家主義的な発展戦略に収斂され」、「自律的・自発的な主体の形成」が民衆に呼びかけられていた時期に[53]、『糞礼記』は「歴史創造の次元が除去された世界」を文学的に顕現させていたともいえる。

もっとも、洗っても「黒い垢がにじみでる」（一七二頁）糞礼、自分の旦那が働いている畑の隣で「作男」の「金旦那」との不倫を楽しむ夫人（一四四―一四六頁）など、『糞礼記』の登場人物やかれらの生活は、あまりにも不潔で淫乱であるがゆえに、「国家主義的な発展戦略」の対象として捕獲されるどころか、むしろ排除すべきアブジェクトに転落せざるをえない。

貧困が開発―近代化への期待のなかで馴致される時代であった。

しかし、糞礼は開発を渇望する「貧しいけど、まじめな」存在でもなければ、近代化した世界を歓迎する「合理的で衛生的な」存在でもない。糞礼の不潔さは、開発の言説では馴染ませることのできない露骨な肉体性を発揮する。自暴自棄と罵詈雑言に覆われている糞礼の世界は、開発―成長にとって適切な環境ではなく、彼と我を分けることすらできない彼女の意識は、「民族」を用いたとしても突破しうるようなものではない。無名性を当然だと思うその感覚もまた、全体への献身を説得すべき対象にはなりえない。[54]

ただし、『糞礼記』が「上昇―超越の欲望を遮断することで、「開発」を封鎖せんとした[55]」としても、それがただちに政治的な意味の獲得につながるわけではない。ここにポピュリズムをアブジェクトたちの政治的高揚の瞬間から説明する必要が生じる。[56]「日韓会談」の妥結（一九六五年）の前後に確立する東アジアの冷戦体制、そして『期待される人間像』の計画（一九六三年）や、[57]「住民登録証」制度の実施（一九六八年）などが示すように、日韓においてそれぞれ善良な市民による国民国家の強化が試みられる過程は、アブジェクトたちのポピュリズムが踏みにじられる過程でもあった。一九六〇年四月の韓国から、その剝製された記憶を辿ってみよう。

帝国日本による植民地支配、解放期の混乱と理念対立、あらゆる共同体的な価値観や倫理の破綻をもたらした朝鮮戦争、李承晩と自由党の破廉恥な横行、一九六〇年を前にした韓国社会は、記憶と忘却のトラウマ、新生への欲望と挫折、ルイ・アルチュセールの言葉を借りるなら「後者の伝統がすべてを覆い尽くしてしまう前に、前者の伝統[58]」が崩れてしまった状況におかれていた。この不気味な空白の時空間において、一九六〇年二月二十八日、大邱で高校生による反政府デモが発生する。民主党の選挙運動への高校生たちの参加を妨げるべく日曜日の登校を命じたことが、その直接的な原因であった。学生たちは「民族愛、祖国愛」に訴える決議文を読みあげ、市内で集会を行った。三月八日と十日には大田の高校生たちが「学園の自由化」を掲げつつデモを起こし、その後、大統領・副統領選挙が実施された三月十五日には、馬山で高校生たちが不正選挙に反対する「昼のデモ」を行い、引きつづき下層階級による「夜のデモ」が勃発した。国家権力は無慈悲な弾圧で市民たちのデモに抗うが、その過程で十三人の人びとが命を落としてしまう。[59]とりわけ、孤児で靴磨きの呉成元（当時二十歳）の死は、蓄積されていた社会底辺層の鬱憤に火をつける結果を巻き起こした。[60]

四月十一日、馬山の港湾に浮きあがってきた十七歳の金朱烈の遺体は、全国で断続的に行われていたデモを革命に導く決定的な引き金となる。顔面に催涙弾が打ち込まれたまま引き揚げられた屍の惨憺たる姿は、「一個人の体に浸透している公権力を克明に物語る」

ものとして、国家権力が「市民たちの日常生活」や「人間の自由における最終的な堡塁である体に鮮やかに刻まれていることを」人びとの目に焼きつけたのである。[61] 馬山で再び靴磨き、売春婦、小学生、日雇い労働者、無職の人びとが参加したデモが起こり、やがて全国各地が革命の炎に燃えるようになった。四月十八日、高麗大学校の学生たちは「青年学徒のみが真正な民主歴史創造の役軍になることを銘心して総蹶起」[62]するという宣言文を作成し、デモをはじめた。翌日には、ソウル大学校を含め、ソウル市内の多くの大学校が一斉に蹶起し、これに市民たちが呼応して大規模なデモが発生する。李承晩政府は戒厳令を発布し、暴力団をも動員する強硬な鎮圧に乗りだしたが、その結果、全国で二〇〇人近い死者、六〇〇〇人以上の負傷者が出ることになり、以後この日は「血の火曜日」と呼ばれるようになる。そして、四月二十五日には大学教授たち二五八人による「時局宣言文」が朗読され、市民たちのさらなるデモを引きだした。結局、四月二十六日に李承晩大統領は下野声明を発表し、李起鵬副統領一家は二十八日に無理心中を遂げる。

二〇一四年から施行された「民主化運動記念事業会法」は、「民主化運動」とは「二・二八大邱民主化運動、三・八大田民主義挙、三・一五義挙、四・一九革命」などであると定義している。[63] 何よりも、大韓民国憲法前文には「大韓民国は、三・一独立運動により建立した大韓民国臨時政府の法統と、不義に抗拒した四・一九民主理念を継承」[64]すると書かれている。このように四月革命の記憶が国家や民主化運動の歴史として公式化する過程において、革命の主体は「学生」や「知識人」に集中された。しかし、これは同時に「革命に参加した数多くの民衆、とりもなおさず都市貧民たちの役割を公的歴史から削除する過程でも」[65]あった。

貧乏なかれらにとって民権とか選挙など何の意味があろうか。その瞬間だけであって、すぐ去ってしまえば、あらゆることを忘れてしまい、一縷のひもじさのみが忘れえぬ宿命のごとく腸にわだかまる。……どうしてこんなことがあるのか。K大学のデモ隊が襲われた件で、高校生たちは「ヤクザ出てこい！」と叫びながら鐘路で再び一大デモを敢行し、ついにはこれが導火線になり、明日を期して市内の全大学生たちが大々的なデモに突入する勢いをみせているのだ。しかし、蜉蝣（かげろう）の命にすぎない庶民たちは、そういうこととはあまりにも縁がない。誰が殴り殺されようが、誰が執権しようが、かれらはものともしない。今日一日の生のために、かれらは口喧嘩し、互いに噛みちぎり、血を流すことでアップアップである。[66]

高校生や大学生、大学教授たちが「決議文」「宣言文」「時局宣言文」などの形式を通じて自分たちの「政治的・法的正当性を闡明す

る言語を確保」しえたことに比べて、「靴磨きのちびや労働者、失業者のような都市貧民たちは自らを正当化しうる集団の言語」[67]をもつことができなかった。各大学の新聞社説が「血を吐くほど悲痛なわが学生たちの義挙により、すべてを成就することができた」「学生たちの血管のなかには、過去の三・一運動や、光州学生事件における先烈の血がほとばしっている」「犠牲になった学生たちに対する新たな哀悼の気持ちが湧きあがる」というように[68]、革命の意義を占有する言説を鋳造するさい、「自由党と関係する人の家か事務室であれば、手当たり次第にぶち壊した」だけでなく、「棍棒や斧」、さらには「数十の小銃とトラック、タクシーなどの車両四十〜五十台を動員して武装機動隊を編成」した民衆の激しい抵抗は[69]、「破壊的な暴動者」[70]におき換えられていった。ましてや、男性学生・知識人たちの運動が自由、理性、民主主義の名で塗られたのに対して、女性たちの運動は「涙」「つぼみ」という表象からも分かるように、か弱い女たちの慰みとしてとり扱われ[71]、売春婦たちのデモとなると単なる滑稽に貶められるだけであった[72]。

会社員B：昼に行われる学生「デモ」をみると、比較的秩序整然としています。去る十一日の夜にみたことですが、そのなかにいわゆるごろつき、靴磨き、いってみれば社会的に不遇な状況にいる子供たちが多くいました。……

学生A：事実馬山には学生ではない、いわば偽学生も多いんです。今回もこういう似而非学生たちが割り込んだのではないかと思います。

教育者B：……昼にやったのは学生ですが、夜にやった「デモ」は不良のやからが主導したもので、その目的が異なるため、学生の「デモ」と関連づけてはならないと思います。これは性格が完全に違うものです[73]。

右の引用文は一九六〇年四月十四日、『韓国日報』の主催で行われた馬山市民たちの座談会の一部である。ここには、「秩序整然」とした「学生」の「デモ」から、不純な存在たち――「ごろつき」「靴磨き」「偽学生」「不良のやから」――をとり除く認識が一般市民にも共有されていた点が露骨に現れている。しかしながら、実際において「くたびれた服の少年たち……靴磨きのちびたち、みすぼらしい姿の失業者たちによりデモ隊は混沌としていた」[74]のであり、「学生」による「歴史創造」の瞬間から、そこに紛れ込んでいるアブジェクトたちを分離することはできなかった。そして、このアブジェクトたちは、民主主義のための学生たちのデモを「意味された事物の輪郭が崩れ」るところへ導いていった。朴泰洵は、興奮した民衆たちが「平和劇場」をとり壊した四月二十五日の夜のことを次のように覚えている。

一つにまとわりついた生と死が、ゆらゆらする汁液のようになり、銃声のなかへと融解されていきそうであった。……あちこちでまるで邪悪な魂を保つ幽霊のように靡く火の光がみえてきた。人びとは火の光をみて矢叫びをあげながら、片っ端から拉いていた。……人びとは動物が出しそうな奇怪な嘆声を打ちあげていた。かれらは目の前に迫った無秩序に狂ってしまい、社会の因習や生活の規範をすっかりと忘却したようであった。……劇場のなかにあったいろんな形象物はどんどん壊れていき、ごみの山に化していった。いわば抽象物になりつつあったのである。列をなしていた椅子は人びとによって破壊され、椅子としての機能を分解させられた。椅子は、ただ少しの金属板と木の合成によって構成されたものにすぎなかったのだ。[75]

もし革命というのが、既存の秩序や支配関係に対して、他の秩序や支配関係を用いてそれを代替するものではなく、秩序や支配関係における形而上学自体を形骸化することだとすれば、右の引用文はその瞬間をもっとも的確に描いているものといって差し支えなかろう。デモの日々を「私の人生のなかで一番幸せだった時間」として記憶する感覚、「私たちは警官が逃げてしまい空っぽになった交番に攻め込み、無条件に破壊した。……当時の私は興奮しすぎて、壊された木の机の破片が腕に刺さっていたことにも気づかずに走り回っていた」という喜悦の瞬間。[76] これは「原始的で本能的な無秩序」、すなわち「誤謬に陥っている秩序を破壊し、人間を束縛するものを解きほぐして、窮屈な社会生活の規範とやるせなさ、不正腐敗に対する鬱憤から飄々と解き放たれ、一つの唐突な無秩序」「高貴な無秩序」を作りあげる瞬間である。[77]

四、「獣魂塔」のレクイエム

李承晩が下野を発表した後も、アブジェクトたちの興奮は冷めることがなかった。しかし、「高貴な無秩序」の状態を推し進めていこうとするアブジェクトたちとは裏腹に、大学生たちは秩序の回復に専念した。「学徒の本分である真理探究」とともに、「この国の主人であり、この社会を担っていくべき学生たちは、この間の興奮から抜けて冷徹に社会の明日を直視」することが強調された。[78]

しかも四月二十七日に李承晩の降伏を勝ちとった後は、革命の混乱した事態の収拾において、青年学徒だからこそ可能であったろうが、見方によってはやりすぎだと思われるほど、とても清廉で公正、円熟した側面をみせてくれた。かれらは現場において興奮している市民たちに帰宅を要請し、ほうきをもってきれいに掃除を行ってから、学園へ戻った。誠に涙ぐましいほど、

青年たちの意気と純潔さはすばらしかったのであり、また学園に戻り再び真理を目指しつつ後日を期そうとする意欲は、いかにも崇高なものであった。[79]

大邱の大学生たちは、破壊された交番で自律的に働きながら治安維持や掃除を率先して行った。腕章をつけたままパトロールカーで収拾活動を指揮した大学生たちは、地方にも出かけて公共財破損の予防など、市民の説得に尽力した。[80] こうした掃除および追悼の儀礼は、「「乱れてしまった」共同体の空間を」「「秩序と愛国心」の名の下で」「正常化しようとする欲望」や、「現存する共同体と主体性が粉微塵になってしまうことへの不安感」の表出でもあった。[81] この共同体・愛国心・秩序への「欲望」と、「無秩序」への「不安感」が、国家権力とも相通ずるものであったことはいうに及ばない。

学徒諸君たちの正義の隊列に、一部のごろつきが入り交じって略奪・放火・破壊などの乱行を事としています。これは諸君たちが頑張って闘いとった名誉を汚させる結果を招いています。実に残念でなりません。……もちろん本戒厳司令部はこうしたごろつきを一掃し、学徒諸君の名誉が毀損されないよう尽力していますが、今のごとく秩序が混乱した状態では慨嘆を禁じえないのであります。親愛なる学徒諸君、このような秩序の混乱を正すために皆様の積極的な協調をお願いする次第であります。[82]

戒厳司令官のこの声明は、「デモの外側」に位置する「法律的なもの、道徳的なもの、宗教的なもの、甚だしくは神話的なもの」が、「デモの内側」にある「陶酔」「共同無意識」を圧迫する場面を象徴している。[83] もちろん、「学生」たちの民主主義に対する純粋な熱情を見下すことはできない。ただし、いうなれば「学生」たちにおいて民主主義が革命の目標であったとすれば、アブジェクトたちにとってはむしろ革命の対象であったともいえるだろう。

隊員のある一人が復興部の前に並んでいた高級乗用車とジープを手当たり次第にとり壊しはじめると、みんながそこに飛びかかった。ガラスが割れ、バンパーが壊され、瞬く間にあの立派な車体がめちゃくちゃになった。その時、幾人かの青年が走ってきて、慌ててかれらを留め立てした。

「私たちは破壊のためにデモをするのではありませんよ！」

学生のデモ隊員のようだった。ただし、車を砕いていた連中の考えは違った。

「われわれが払った税金だろうが。あいつらをこんな車に乗せるために税金を払ったんじゃない。邪魔すんな。」

「だからといって壊してしまう必要はないでしょう。これはわ

れわれの財産であり、国家の財産でもありますよ。乗っていたやつが悪いだけで、この車を壊して何がどうなるんですか？しかも、このなかには外国人の車もあるんですよ。外国人への面目を考えてくださいよ。」

「外国人がどうした。援助物資をもってきては、高官たちと山分けしただろう。われわれには餅一個さえくれなかったんだ。もらったのは食べる最中に吸い殻が出てくる、ごみみたいな粥だけだよ。」

「しかし、そんな八つ当たりのために私たちがデモをするわけではないんですよ。」

「畜生！　では今度違う大統領になるとただで食わせてくれるのかい？　腹減ったやつには感情しか残らないもんだよ。[84]」

四月革命が切り拓いた「無秩序」の空間において、混乱の収拾を藉口して軍事クーデタが行われる（一九六一年五月十六日）。左翼系知識人たちと一部の大学はクーデタを支持する立場を表明し、それに相応して「善意の独裁」という言葉が人びとの間で流行っていった。[85]四月革命は、そのように軍事独裁政府への道を開いてしまい、アブジェクトたちのポピュリズムは凄まじい国家権力の恐怖に曝されていくこととなる。この過程は、東アジアにおいて冷戦体制が固着していく過程でもあった。四月革命とほぼ同時期に日本で行われた安保闘争もまた、世界を冷戦のシステムをもって封じ込めようとする権力側への反発として現れた点に注意する必要がある。

林志弦は、一九六八年前後に登場した新たな抵抗の動きを「英雄的闘争」「伝統的な革命」の概念と対比させ「「卑怯な」革命」、つまり「毎日毎日、また瞬時ごとに一定の勇気を要求する」「「文化ゲリラ」らの闘争」だと名づけ、この「卑怯な革命が狙ったのは、日常に順応する生存を強要する近代権力の日常支配メカニズムであった」という。[86]ただし、同時期における韓国では、大統領暗殺のため北朝鮮から送られてきたゲリラ武装組織との銃撃戦が行われるなど、ヨーロッパ各国で遂行されていた「陣地戦の革命」が現実化する余地などなかった。[87]『糞礼記』は、四月革命の挫折と国民国家体制の強化という韓国の状況において、「陣地戦の革命」の可能性と臨界点を最大限に表現した小説の一つだったかも知れない。

『糞礼記』の最後の場面において、ヨンパルは、意味深長な笑みを含みながら村を去っていく糞礼をみて、動物たちの慰霊のために屠所のなかに建てられた「獣魂塔」を思い浮かべる。屠所に入るやいなや、生と死が立ち替わりつづける重圧に耐えることができず、例外なく糞をたれてしまう動物たちに、糞礼の後ろ姿を重ねるヨンパルの眼差しは、アブジェクトたちの運命を予感させるものではなかろうか。心のなかに糞礼のための「獣魂塔」を建てるヨンパルの心情は、しかしながら今日の私たちの感覚ともさして遠いものでは

ないと思われる。「失われた二十年」において民主主義の根本的な再検討という課題が私たちに突きつけられている。『糞礼記』とその周辺を書き留める作業の意義は、この課題に対する一つの手がかりになるだろう。

注

（1）方榮雄「糞礼記（第一部）」『創作과批評』六号、一九六七年五月（引用は、方榮雄『糞礼記』創作과批評社、一九九七年、二四頁、以下この小説からの引用は頁数だけを本文中に記す）。

（2）小説のなかでは「トンイェ」（tong-ye）と呼ばれる。「トン」は糞の固有語、「イェ」は女性の名前によく使われる「礼」の朝鮮語発音である。

（3）戦後の韓国社会における『創作と批評』の発刊とその意義などに関しては、白樂晴・崔元植・鵜飼哲・柄谷行人「【共同討議】韓国の批評空間」（『批評空間』第Ⅱ期第一七号、太田出版、一九九八年）を参照。

（4）数少ない先行研究のなかで、権보드래「四月의 文学革命、近代化論과의対決：李清俊과 方榮雄、『散文時代』에서『創作과批評』까지」（『韓国文学研究』三九号、二〇一〇年）は、『糞礼記』の画期的な側面を浮き彫りにした重要な成果だといえる。本稿も多大な示唆を受けている点を明記しておく。

（5）「失われた二十年」に関してもう一つ指摘すべき問題は、現代日本におけるアジア諸国との新たな関係構築の機会が再び失われてしまったという点であろう。この問題については別の論考で考察を行うことにしたい。

（6）デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義――その歴史的展開と現在――』（二〇〇五年）渡辺治監訳、森田成也他訳、作品社、二〇〇七年、九頁。

（7）こうした一連の流れについては、大嶽秀夫『日本型ポピュリズム――政治への期待と幻滅――』（中公新書、二〇〇三年）、同『小泉純一郎ポピュリズムの研究――その戦略と手法――』（東洋経済新報社、二〇〇六年）などを参照。

（8）山口二郎『ポピュリズムへの反撃――現代民主主義復活の条件――』角川書店、二〇一〇年、三六頁。

（9）ヨーロッパにおける右翼ポピュリズム政党の成長と特徴などについては、畑山敏夫『フランス極右の新展開――ナショナル・ポピュリズムと新右翼――』（国際書院、一九九七年）、国末憲人『ポピュリズムに蝕まれるフランス』（草思社、二〇〇五年）、島田幸典・木村幹編『ポピュリズム・民主主義・政治指導――制度的変動期の比較政治学――』（ミネルヴァ書房、二〇〇九年）、河原祐馬他編『移民と政治――ナショナル・ポピュリズムの国際比較――』（昭和堂、二〇一一年）、高橋進・石田徹編『ポピュリズム時代のデモクラシー――ヨーロッパからの考察――』（法律文化社、二〇一三年）などを参照。

（10）韓国のポピュリズムに関する考察としては、『歴史評論』一〇五号（二〇一三年）の特集企画「포퓰리즘과 民主主義」に収録された諸論文、および木村幹の諸論考（「ポピュリズムの中の「歴史認識」問題――日韓の事例を中心に――」『レヴァイアサン』四二号、二〇〇八年、「韓国におけるイデオロギーとしてのポピュリズム――「アメリカ産牛肉輸入問題」をめぐって――」島田幸典・木村幹編前掲『ポピュリズム・民主主義・政治指導』、「外国人参政権を推進する「ナショナル・ポピュリズム」――盧武鉉政権下の韓国の事例から――」河原祐馬他編前掲『移民と政治』）を参照して頂きたい。

（11）徐炳勲「포퓰리즘과 民主主義」『Revista Iberoamericana』二三巻二号、二〇一二年。

（12）スラヴォイ・ジジェク『ポストモダンの共産主義――はじめは悲劇としし

て、二度めは笑劇として――』（二〇〇九年）栗原百代訳、筑摩書房、二〇一〇年、一〇七頁。なお、こうしたポピュリズムの性格については、鵜飼健史「ポピュリズムの両義性」（『思想』九九〇号、二〇〇六年）、杉田敦「「決められない政治」とポピュリズム」（『世界』八三五号、二〇一二年）などを参照。

（13）佐高信・魚住昭編『だまされることの責任』角川書店、二〇〇八年。

（14）民主統合党大選評価委員会編「一八代 大選 評価 報告書：敗北 原因 分析과 民主党의 進路」二〇一三年四月、洪鍾學編「大選評価報告書의〈少数 意見書〉」二〇一三年四月。

（15）金允泰「福祉 사라져도 朴槿恵 支持率 下落하지 않은 理由는?」『프레시안』二〇一四年一月一七日、民主統合党大選評価委員会編前掲「一八代 大選 評価 報告書」二三三頁。

（16）スチュアート・ホールは、「サッチャリズム」「権威主義的ポピュリズム」などの概念を用いて、経済的危機や大衆の不満を文化政治のレベルで統合する新たな右派の戦略を分析するなかで、既存の左翼がそのような文化やイデオロギーの側面をひたすら「反映」の関係としてのみ捉える経済還元論を固守している点を批判する（Stuart Hall, "Popular-Democratic vs Authoritarian Populism: Two Ways of 'Taking Democracy Seriously'", A. Hunt (ed.), *Marxism and Democracy*, London, Lawrence and Wishart, 1980; Id., The Hard Road to Renewal: *Thatcherism and the Crisis of the Left*, London, Verso, 1988）。

（17）「五〇代 保守化論은 誇張됐다」『오마이뉴스』二〇一三年一月一二日。

（18）野田昌吾「デモクラシーの現在とポピュリズム」（高橋進・石田徹編前掲『ポピュリズム時代のデモクラシー』）一六頁、馬場優「オーストリアのポピュリズム――ハイダーからシュトラッヘへ――」（同）一九三―二〇〇頁、梶原克彦「オーストリアにおけるポピュリズム現象と民主主義――戦後政治システムの変容――」（島田幸典・木村幹編前掲『ポピュリズム・民主主義・政治指導』）一五四―一六四頁などを参照。

（19）Slavoj Zizek, "Against the Populist Temptation", *Critical Inquiry* 32, University of Chicago, 2006, p.552.

（20）吉田徹『ポピュリズムを考える――民主主義への再入門――』ＮＨＫ出版、二〇一一年、九頁。

（21）Benjamin Arditi, *Politics on the Edges of Liberalism: Difference, Populism, Revolution, Agitation*, Edinburgh University Press, 2007, pp.56-75.

（22）吉田前掲『ポピュリズムを考える』一一頁。ポピュリズム運動の起源は、一八七〇年代におけるロシアのナロードニキによる農村啓蒙運動、そして地主や金融資本に対抗して小作人・自作農の権益を守ろうとしたアメリカの民衆党（People's Party）に由来する。すなわち、ポピュリズムの初発は「基層民衆の抵抗運動」にあったのである（陳泰元「포퓰리즘、民主主義、民衆」前掲『歴史批評』一〇五号、一八六―一八七頁）。

（23）陳泰元前掲「포퓰리즘、民主主義、民衆」一九八―一九九頁。

（24）松谷満「「ポピュリズム」の支持構造――有権者調査の分析から――」『歴史評論』七五一号、二〇一二年、四四頁。

（25）山口前掲『ポピュリズムへの反撃』一二四頁。

（26）吉田前掲『ポピュリズムを考える』一二頁。

（27）山口前掲『ポピュリズムへの反撃』二一二頁。

（28）吉田「いかに共同性を創造するか――新たな政治倫理の生成過程としてのポピュリズム――」『世界』八三二号、二〇一二年、一二一頁。

（29）吉田前掲『ポピュリズムを考える』二一八―二一九頁。

（30）マルクス「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」（一八五二年）『マルクス＝エンゲルス全集』第八巻、大月書店、一九六二年、一五四―一五五頁。

（31）陳泰元前掲「포퓰리즘、民主主義、民衆」一九九頁。

（32）千政煥・権보드래編『一九六〇年을 묻다：朴正熙 時代의 文化政治와 知性』千年의 想像、二〇一二年、九五頁。

(33) 同右、九六頁。
(34) 白樂晴「編集後記――「創作과批評」二年半――」『創作과批評』一〇号、一九六八年五月、三七四頁。
(35) 同右、三七三頁。
(36) 千政煥・権보드래編前掲『一九六〇年을묻다』九八頁。
(37) 同右、九九頁。
(38) 同右、九九頁。
(39) 同右、一〇二頁。
(40) ジュリア・クリステヴァ『恐怖の権力――〈アブジェクシオン〉試論――』(一九八〇年) 枝川昌雄訳、法政大学出版局、一九八四年、六頁。「abject」は「ab (分離すべく) + ject (投げ出されたもの)」の意味をもつものとして、「対象 objet (ob (前に) + jet (投げ出されたもの))」ではない点に注意すべきである (同、三頁)。
(41) 金哲は、クリステヴァのアブジェクトの概念を用いて、戦後の韓国社会における暴力の問題を論ずる (「われわれを守るおぞましいものたち――到来しなかった「戦後」――」田島哲夫訳、『思想』一〇九五号、二〇一五年七月)。本稿は、金哲のこうした方法論に多くの示唆を受けている。
(42) クリステヴァ前掲『恐怖の権力』四・五・六頁。
(43) 同右、四頁。
(44) 同右、七頁。
(45) 同右、七頁。
(46) 同右、一五頁。
(47) 同右、七頁。
(48) 同右、七頁。
(49) 同右、三一二頁。
(50) 同右、四頁。
(51) 『《巻頭言》祖国을 痛哭한다」『青脈』一巻三号、一九六四年一一月、一一頁。
(52) 「特集 韓国人의 異相気質」『青脈』一巻四号、一九六四年一二月、八〇頁。
(53) 黄秉周「朴正熙 体制의 支配談論과 大衆의 国民化」林志弦他編『大衆独裁：強制와 同意 사이에서』책세상、二〇〇四年、四八〇―四八一頁。
(54) 千政煥・権보드래編前掲『一九六〇年을묻다』一〇三頁。
(55) 同右、一〇三頁。
(56) エルネスト・ラクラウはポピュリズムを論じるさいにもっとも重要な思想家である。シャンタル・ムフとともに主唱した「ポスト・マルクス主義」の核心には、七〇年代から行われていたポピュリズム論が据えられているともいえる (『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』(一九七七年) 横越英一監訳、柘植書房、一九八五年)。ラクラウは二〇〇五年には、『ポピュリズム的な理性について』を刊行し、ポピュリズムにおける政治的抵抗の可能性を提示するに至る (*On Populist Reason*, London: Verso, 2005)。ここには「ポピュリズムなくして社会主義はなく、またポピュリズムの最高形態は社会主義以外にはありえない」(前掲『資本主義・ファシズム・ポピュリズム』二〇一頁) といった過去の主張が、「プレブス plebs」の検討によって具体化されている。「プレブス」とは「ポプルス populus」のように組織されておらず、分断されたまま不安定な状況におかれている人びとを指す概念である。こうしたラクラウの主張には、またポピュリズム研究においてもっとも重要な地域でもあるラテン・アメリカでの実際の経験が大きく影響していると思われる。ラクラウのポピュリズム論に関しては、陳泰元前掲「포퓰리즘、民主主義、民衆」、布施哲「回帰する人民――ポピュリズムと民主主義の狭間で――」(『IRS』第九・一〇号併合、二〇一二年) などを参照。
(57) 『期待される人間像』については、ハリー・ハルトゥーニアン「国民の物語／亡霊の出現――近代日本における国民的主体の形成――」(キャロル・グラック他編『日本の歴史 第二五巻 日本はどこへ行くのか』講談社、二〇〇三年) を参照。

(58) ルイ・アルチュセール『マキャヴェリの孤独』(一九九八年) 福井和美訳、藤原書店、二〇〇一年、四一六頁。

(59) 大邱、大田、馬山におけるデモの経緯については、金台一「大邱의 2·28과 4·19 革命」(鄭根植・李浩龍編『四月革命과 韓国民主主義』선인、二〇一〇年)、許宗「大田·忠南地域 四月革命의 勃発」(同)、李殷珍「3·15馬山義挙의 地域的 起原과 展開」(同) などを参照。

(60) 「靴磨きたちは、呉成元の死体が入っている棺桶を担いで市街を回った後、都立病院の裏山に埋めた」という (朴泰洵「四月革命의 起爆剤가 된 金朱烈의 屍身」『歴史批評』一八号、一九九二年、一九〇頁)。

(61) 金승현「新聞 写真에 나타난 人本主義的 価値：4·19 革命 報道写真을 中心으로」『커뮤니케이션科学』一七号、二〇〇〇年、四三頁。

(62) 「四・一八宣言文」『青脈』二巻一号、一九六五年一月、一九八頁。

(63) 国家法令情報センター「民主化運動記念事業会法」(法律第一二八四号、二〇一四年一一月一九日試行) を参照 (http://www.law.go.kr/lsInfoP.do?lsiSeq=162165&efYd=20141119#0000、二〇一五年六月二〇日アクセス)。

(64) 国家法令情報センター「大韓民国憲法」(憲法第一〇号、一九八八年二月二五日試行) を参照 (http://www.law.go.kr/lsInfoP.do?lsiSeq=61603&efYd=19880225#AJAX、二〇一五年六月二〇日アクセス)。

(65) 金美蘭「「젊은 獅子들」의 革命과 蒸発되어버린「그／녀들」」金銀河他編『革命과 女性』선인、二〇一〇年、一二〇頁。

(66) 呉尚源「無明記 (一)」『思想界』九七号、一九六一年八月、三四五頁。

(67) 金美蘭前掲「「젊은 獅子들」의 革命과 蒸発되어버린「그／녀들」」一二一頁。

(68) 「四・一九는 누구도 利用할 수 없다」『ソウル大学校大学新聞』二六九号、一九六〇年五月二日 (『青脈』三巻二号、一九六六年四月、一八七頁)、「学生革命의 意義를 살리며 앞날의 터전을 닦자」『高大新聞』二四〇号、一九六〇年五月一四日 (同、一八八頁)、「韓国의 十字軍 運動 四・一九学生義挙에 부친다」『延世春秋』一九六〇年四月二七日 (同、一九〇頁)。

(69) 朴壽萬他編『四月革命』四月革命同志会出版部、一九六五年、四六一頁。

(70) 金美蘭前掲「「젊은 獅子들」의 革命과 蒸発되어버린「그／녀들」」一三八頁。

(71) 曹華永編『四月革命闘争史：取材記者들이 본 四月革命의 底流』国際出版社、一九六〇年、九六頁。

(72) 金美蘭前掲「「젊은 獅子들」의 革命과 蒸発되어버린「그／녀들」」一四六—一五二頁。

(73) 三・一五義挙記念事業会『勝利의 記録』馬山日報社、一九六〇年、七六頁 (引用は、さしあたり、金주현「「義挙」와「革命」사이：잊힌 女性의 叙事들」金銀河他編前掲『革命과 女性』一六六頁による)。

(74) 呉尚源「無明記 (三)」『思想界』一〇〇号、一九六一年一一月、四一六頁。

(75) 朴泰洵「무너진 劇場」(一九六八年)『韓国小説文学大系』五〇巻、東亜出版社、一九九五年、四四—四六頁。

(76) 「白潤善義挙談」『三・一五義挙』四号、一九九七年、三七・三八頁。

(77) 朴泰洵前掲「무너진 劇場」四八・五五頁。

(78) 前掲「四・一九는 누구도 利用할 수 없다」(一八七頁)、前掲「学生革命의 意義를 살리며 앞날의 터전을 닦자」(一八九頁)。

(79) 「合理的 経済樹立만이 民主革命의 課業이다」前掲『青脈』三巻二号、一九四頁。

(80) 四・一九民主革命大邱・慶北同志会編『大邱四・一九民主革命：主役들의 回顧』二〇〇九年。

(81) 権明娥『淫乱과 革命：風紀紊乱의 系譜와 情念의 政治学』책세상、二〇一三年、二三五頁。

(82) 「秩序바로잡자」『東亜日報』一九六〇年四月二七日。

(83) 朴泰洵前掲「무너진 劇場」四八頁。

(84) 呉尚源前掲「無明記 (三)」四一六—四一七頁。

(85) この一連の過程については、千政煥・権보드래編前掲『一九六〇年을 묻다』、洪錫律「一九六〇年代 知性界의 動向」（韓国精神文化研究院編『一九六〇年代 社会 変化 研究：一九六三～一九七〇』백산書堂、一九九九年）などを参照。

(86) 林志弦「六八年革命と朝鮮半島――過去になった未来――」渡辺直紀訳、アラン・バディウ他編『1968年の世界史』藤原書店、二〇〇九年、一六六―一六九頁。

(87) 同右、一六九―一七三頁。